

奈良高専 図書館だより

No. 17

記事

1. 図書室20年史余録
図書室委員長 小谷 稔
2. 卒業生(昭和58年度)からのメッセージ 4編
3. 利用統計
4. 雑誌アンケート報告
図書室

1984年5月 奈良工業高等専門学校図書室 発行

図書室20年史余録

図書室委員長 小 谷 稔

昨年度、全校学生を対象に図書室に置いてある雑誌についてのアンケート調査をした。現在月々入れている雑誌の中で、やめてもよいものの上位は、「思想」「中央公論」「文芸春秋」などであった。そして購入希望雑誌の上位は、オートバイ関係のものいくつかが目立っていた。この傾向は、現在の学生の関心、精神の姿勢をよく示しているもので興味深い。たしかに「思想」や「中央公論」などは、1部の知識階級に読者が限られているのが実態であろう。本校の学生だけが敬遠しているのではない。

本校は今年創立20周年ということで、その記念事業が計画されている。今秋11月の記念式典と20年誌の刊行が2大事業である。20年誌では、校内各部門で、20年の歩みが回顧され整理されている。図書室でもその20年をふりかえってみた。いろいろ興味深いことがあったが、昭年40年代は、学生会の図書委員会の活動がかなり活発であったことに注目した。学生会総会にも学生会の、広報・図書・体育その他の各委員会がそれぞれ今年度の活動方針を掲げてワラ半紙1枚に印刷して配布している年さえあった。図書委員会も学生の要望を図書室の運営に反映させることに努めており、希望図書のアンケート調査も恒例のように実施している。

昭和43年度には、学生からの購入希望図書として「朝倉物理学講座」全20巻、「わかりやすい機械講座」全27巻、「天体観測シリーズ」全10巻、「中国の思想」全12巻などがあり、その質といい、量といい、いかにも創立期の学生の意気込みが躍如としている。また昭和46年度の記録によれば、図書室備え付けの雑誌で、よく読まれて汚れの著しいものとして、「朝日ジャーナル」「文芸春秋」「中央公論」などが、科学雑誌や趣味的雑誌にまじってあげられている。冒頭に述べた昭和58年度の学生が不要雑誌の筆頭にあげた「中央公論」や「文芸春秋」などが、10年余り前には汚れるほど読まれていたのである。

この変化は、本校学生だけのものではなく、日本の社会全体の風潮であろう。全体の風潮なので変化に気づきにくい。考えてみると私たちは日々の仕事や予定に追われながら、かなりまじめに生きているにもかかわらず、結局は、狭い周囲の人々の、狭い関心や興味の中だけで生きているように思われる。流行と時の流れの中で自分では気づかずに「集団錯覚」の日々を過ごしているように思われる。集団錯覚にかかっていることに気づかないことは精神的には平穏であるが、しかし、それは人間としての知性が死んでいる。本や雑誌でも硬派が敬遠され軟派が愛好されているのが今の世の風潮であるが、それに背を向けて知性の牙を研ぐ反骨の学生が少数ではあっても健在であることを信じたい。

読書の効用

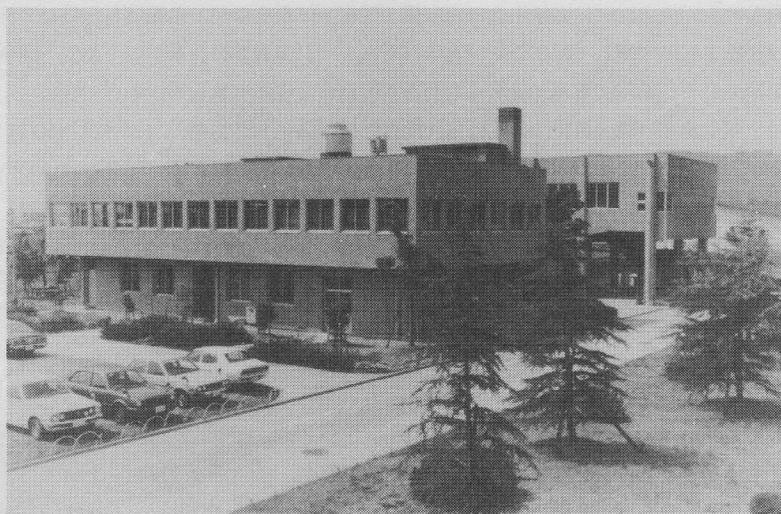
化学工学科 河越幹男

どの本か忘れたが、何かで読んだ事である。

読書の効用の一つにグライダー効果というのがある。グライダーはそれ自身エンジンを持たないから、自力で飛び立つことはできない。何かに引っ張ってもらって初めて飛ぶことができる。読書の場合にもこれと似たことが起る。自力ではそんなに深いところまで思索が及ばない場合でも、本を読むことによって思いもかけないほど高い思想に到達できることがしばしばある。学生の頃、普段は下らない事に時間を費しているくせに、試験になると、無性に勉強以外の本が読みたくなった思い出がある。大抵こう思うのが常であった。こんな試験勉強よりもこの本を読む方が価値があるのに、試験勉強しなければならないから本が読めない。試験なんか下らない。また、こうも思った。今度試験が終わったらもっと本を読もう。しかし、大抵の場合、試験が終ると試験中に感じたような切実な読書欲がなくなっている。多分、似たような経験をされている学生諸君も多いはずである。これは、一体どういう事であろうか。試験勉強がいやだから、その逃避の手段としてしていると考えられることもできる。しかし、そればかりではあるまい。多分、この場合には、逆に試験勉強によってグライダー効果が起ったのではなからうか。試験勉強によって頭脳が活性化され、今行なっている勉強だけでは物足りなくなったためと思われる。こういった時に読んだ本は、非常におもしろく感動したものも少なくない。このグライダー効果は、何か物を書くような場合にも応用できる。特に英文を書く場合など、それに類した原書や英語の論文をいくつか読んでから書き始めると、比較的容易に書くことができる。お陰で、大分助かった。たしかに効果がある。

読書において、一つだけ気を付けなければならないことがある。グライダーは自らのエンジンを持たない。グライダーにのみ乗り続けると、自力で飛行することを忘れる恐れがある。自分が現在グライダーに乗っているのか、自力で飛行しているのかは、常に自覚していることが大事である。

随分、多くの本を読んだ。これからも読み続けるだろう。できるだけ良いグライダーに乗って、より高く、より遠くまで飛びたい。そして、いつの日か自分のエンジンで飛び立ちたいと願っている。



図書館外観

卒業生からのメッセージ

書物と青春と可能性と

機械工学科卒業生 大隅慶明

「20代に何かをやった男が勝つ。私がこの本を通じて口を酸っぱくして言っている様に、20代というのは、君の生涯の人格を造る最後の準備期間であるのだ。20代の性格は一生の性格なのだ。それだからいま君は必死になって自分の一生を打ち立てなければならない。」

私は本年20歳。いよいよ青春時代も後半に差しかわろうとする年代になった。「青春」この響き、好きである。10代であった頃の私を思い出してみる。勉強、野球、友達、出逢い、別れ、いろいろな事があった青春だった。20代に何かをやった男が勝つ。その通りだと思う。しかし、今、私に何か出来るだろうか。疑問符である。

「今は時代が違う。戦争の危機をはらみ続けながらも、日本は表面は平和である。20代の男の魂を根底から揺さぶる様な時代ではないし、また20代の命を、天皇の名のもとに国家の為にと称して、戦場に無惨に散らす「わだつみの声」を再現してはならない。

しかし、男が失ってはいけないのは「凛々しさ」である。男として生きてゆく気概である。女と同じに小さく生きていくのならば生きる必要はない。女が生きていけばいいのだ。女達は子供を生むから、一夫多妻になっても日本人の子孫が絶えることはないのだ。

では一体どうすれば凛々しく生きられるのであろうか。簡単に言えば、維新の人々が並み外れて努力した様に何事でもいいからまず努力する事である。

私は、はたして日々凛々しく生きているだろうか。努力。何か一つの事を成就する為にそれを惜しんではいないだろうか。維新の人、坂本龍馬、西郷隆盛。私はテレビというメディアを通じて彼らを何回か、知る機会を得た。そして書物でも。彼らは、嵐の暗海を、大波にもみ砕かれながらも、一筋の光をつかむ為、その小舟の櫓を最後まで離さず、日本の未来をしかと睨んでいた。偉大である。私は今、日本の未来を少しでも自分の力で動かしてみようと努力、がむしゃらに努力できるだろうか、彼らのように。疑問符である。

「新しい時代を造ろう。新しい自分を見い出してゆこうとするエネルギーこそ、若者だけに与えられた天の配剤なのである。これを使わなくては損だ。そのエ

ネルギーを猛烈なファイトで消費している時には、無我夢中で、いったいどちらの方向へ自分が突走っているのか、わからないのである。しかも結果が失敗に終わることがある。それを挫折という。何もしないで、ただ頭の中で漠然と考え、ああ、これはやっても無駄だろうと思いついでしまうのは挫折でも何でも無い。ただ怠惰だけである。駄目だと思ったらもう一度最初からやり直せ。」

エネルギー、全くない訳ではない。失敗、恐れている訳でもない。挫折、いや怠惰、これの連続なのか。大きな困難、壁にぶつかる。どうしても越えられない。苦悩する。しかし、何度ぶち当たっても壁は越えられない。くそ。もう一度最初からやり直す。あるいはもう挑戦をあきらめる。疑問符である。

「人間にとって最も必要なのは、自分の中に萌え出た可能性を何とかして自分で引き出そうとする努力を怠らないこと、一度その力を伸ばしたら、今度はそれがどの様に他人の為に役立つであろうかを考えていくことである。それを人間は生きがいと呼んでいる。」

私は自分の可能性は、全部引き出したつもりである。少なくとも18、19歳の時はそうであった。自分という器ではとてもこなせそうにないようなこと。野球部の主将、学園祭の委員長。自分の可能性の域を越えていたかどうか私は知らない。しかし私は、この時はがむしゃらであった。どの様に他人の為に役立つか、考えたことはない。そして考える必要もない。何故なら、今になって、私は色々な人から、「あの時は苦しかったが、今はとても良い思い出。」と声を掛けられる。そんな時、自分はこの人の為に少しでも何かしてあげる事ができたんだと思う。たとえそれが単なる思い出作りでも大いに結構である。これが生きがいなのか。今、私に疑問符はない。忌まわしい疑問符はない。

しかし、私はどんなに忌まわしくとも、一生疑問符を持ち続け生きてゆきたい。主将や委員長の解答が得られたくらいで満足したくはない。これも一つの青春だろう。しかし、もっと色々な事をやり、もっと大きな社会で堂々と通用する様な生きがいを見つけてゆきたい。そして20代に何か一つ、たった一つでよいから、何か大きな答えを得たい。何でも良いのだ。そして私はその大きな解答を得る為に、努力を惜しまず、日々凛々しく生きたい。それには書物をもっと読む。20代に私は何百冊も本を読みたい。そして自分を最もうま

く表現できるようにしたい。本は私に無限の可能性を与えてくれる。何故なら、今私に20代に何かを行えという、警告を与えてくれた。何も行なわず頭の中でどうこう考えるのは怠惰なだけだ。私はこれから、生きがいを見つけるために輝かしい青春を送ろうと思う。

後輩諸君、何かを始めてもらいたい。たとえそれが今まで重くてたまらなかつた書物の第一ページ目を開けることでもよいのだから。それから何かがつかめれば、それでよいのだから。

鈴木健二『男は20代に何をなすべきか』

筑豊の本と人

機械工学科卒業生 西脇康人

「かぜのおくりもの」に誘われて筑豊へ。

最後の夏休みの終わりにいくつかの絵本屋さんが共催する講演会「サマー・カレッジ 子どもの本はいま」で、長谷川集平さん（絵本や児童書のさし絵を書く人）が一冊の本を紹介して下さいました。「かぜのおくりもの」飯田栄彦・作、長谷川集平・絵、小学校中学年以上向き、となっています。お父さんを交通事故で失くした少女（幼稚園に通っています）を“かぜ”になったお父さんが少年時代を過ごした、ある炭鉱住宅街（略して炭住と呼びます）へ連れて行きます。時間を戻って。やがて、山で炭じん爆発が起こり少年だったお父さんはお父さん（つまりおじいさん）を失うのです。その辺り、簡単な言葉が使ってあって直接心に入り込んできます。どう言えば良いのでしょうか。そう、頭で理解して“悲しい”“かわいそう”と思うのではなくて心の中にある何かが反応してしまうのかもしれない。まるで自分のことのように。

と、ひどく感動したので、冬休みに卒研が終わってから一人九州へと向かったのです。

もうすぐお正月という12月30日、福岡県宮田線の終着駅、筑前宮田に降り立ちました。降りたのはいいけれど、どっちへ行けばよいのかわかりません。なにせ予備知識どころかどこへ行くつもりなのかも考えずに「筑豊へ行こう」だったものですから。役場は閉まっているし、おまわりさんも警ら中とかでないし。仕方がないので目を閉じました。耳をふさぎました。したら、フッと柔らかな風が私を呼んだような気がしてそれは本当は道の向こうの化粧品屋さんのにおいだったのかもしれないし、その隣りで揚げていたコロッケのものだったのかもしれないけど、とにかくその方向

に歩きだしました。とぼとぼ……。町が遠ざかります。ずりずり……。ところどころに真新しいアパートがあるだけ。1時間歩きました。開発中の住宅地。3時間歩きました。大きな窪み。やっぱりアカンかったかなァ。もうちょっと歩いてもなかつたら帰ろ。4時間歩いてゆるやかな坂道の頂上で、ハーッと息をつきながらあたりを見回した時、ベージュ色のマンションのすぐ向こうに何やら真黒なところが見えました。頭は何も感じていないのに足だけが勝手に歩きはじめて、その中へと下りていきました。目の前に並ぶものを見ると胸がつぶやきます。「炭住や。」一つの長屋に同じ造りの部屋がいくつかあって、屋根の半分落ちているところ、壁の崩れているところ、畳は藁に戻り、根太は抜け、しかしそれは荒らされたのではなく自然に風化したものでした。しばらくポケーッとしていると、通りかかったおっちゃんに声をかけられました。「おはん、何しとるんな」少し驚きながらも私は「ここは、炭鉱の人が住んであったところですか」「ん」「…………」「寒いやろ。汚いところやけど、うちへ来るか」（と、ここで突然、関西弁になりましたが、九州の言葉をよく覚えていないので……）おっちゃんは、長屋の端にある一つの部屋へ私を入れてくれました。「あんた、なんでこんなとこ来たんや。わざわざ下へ降りて来んでも、長崎とか、もっときれいなところがあるやろか」「はあ。勝手に足が…。えーと、その、なんというか…。ダムに沈んだ村ってよう聞かはりませんか。あれと同じですねん」「？」「みんな観光客はダムの上からその村を見下ろしますでしょ。僕はあれがキライですな。村を沈めることによって金の力で作られたダムというのは、そこから見下ろす人にとっては境界の役目を果たしてしまうと思うんです。つまりなんぼ村のことを考えてもその境界線が『結局はオレらとは関係のないことなや』ということをや頭のどこかに作ってしまうから、実際に同じ場所、その村ならその村に立たんと何も感じられへんです。私の場合は。「おもろいこと言うなァ、おにいちゃん」と、「えーと」とか“その…”とかを混ぜながら話した私におっちゃんはそう答えてくれました。

「おっちゃんはどこに長いこと住んでるんですか」「…昔は、貧乏してもみんなて住んでたんやけどな。今はもうわし一人じゃ」「おっちゃんも炭掘ったはったんですか」「ああ…」それからしばらく黙っていたおっちゃんは何やらごちゃごちゃと入っている棚で探していたものを持ってきて「にいちゃん、これ読むか」と手渡されたのは、土門拳さんの写真集「筑豊のこどもたち」でした。以前からうわさを聞いていたけど見

るのは初めて。ページをめくるたびに、いま見た炭住がそのままそこにありました。お母さんがおらず、お父さんもやがて死んでしまう。るみえちゃんとさゆりちゃん、という幼い姉妹。「かぜのおくりもの」と重なりあう世界。それを感じていたのは頭でなく『何か』でした。よくわからないけれど、それはからだ全体かもしれないけれど、何かを感じていました。そして、うかつにも涙を落としてしまったのです。「わしらは町の人間から炭坑者と呼ばれ冷たい目で見られとった。その中でも金をちょっとでもよけ持つとる奴は金のない奴を見下げとったんやな。あんたそのるみえちゃんらの写真を見てかわいそうやと思ったか」「……思わんかった。頭が動かへんのです。せやけど、なんか自分のことみたいで……」「そうか、あんたは人間やな。役人とかエリートの奴らはな、頭だけで考えて『かわいそうや』と言いよるのや。言いよるだけやけどな」「そんな人間にはでけへんことをわしらはやったんや。(その本の)うしろの方で、みんなが団結しとる写真あるやろ。あれがわしらの力の結晶や。せやけど、はじめからそんだけ集まったんとちゃうねんで。1人や。一人の若い奴が何べんも上の人間と闘いよったんや。このままやったらあかんてな。ええか、にいちゃん、1人の力ちゅうのは、しれたる、なんもでけへんかもしれへん。せやけどな、その1人が何か言い出さんなあかんや。誰かやりよるやろうとか、このまま何事もなく終わってくれんねやったら、そんでええわとか、そんなこと考えとったら、結局は大きな力、企業とか権力に食われてしまうんやで。先ず1人でやるねん。そしたら自然と仲間はずいてきよる。はじめから仲間を作ろうと思たらあかんて、仲間内だけのグチに終わってしまうからな」おっちゃんは、私のうしろの壁を見つめながら話してくれました。

最後の春休みに私は北海道へ行きます。

羽幌(はぼろ)、万字(まんじ)、夕張、炭鉱の町。未だに残っている人々に会って、その話をたくさんの人に伝えたい。

筑豊で会ったおっちゃんは、私を呼んだ「かぜ」だったのかもしれない。

最後に「かぜのおくりもの」を。

『かぜに ふと たちどまることがある
なつかしいうたが きこえたようで
かぜに ふと なみだぐむことがある
なつかしいこえが はげましてくれたようで
かぜに ふと ほほえみかえすことがある
なつかしいかおが かえってきたようで……』

「僕の読書観」

電気工学科卒業生 後藤雅晴

「読書観」などという立派なタイトルをつけてしまったが、実際のところ難しい話をするつもりはない。というのも、僕は大抵の場合何の考えもなしに(「これを読んで、レポートに書きなさい」とかいう、異常な状況は別として)、表紙を開くことが多い。あからさまに言えば、行きあたりばつりに気の向くまま本を読むというのが普通なのである。そんなわけだから、当然ひいきの作家や、いわゆる「座右の書」とかいうものもない。「読書観など、逆立ちしたって出てくるはずもない。書くことがない以上、もうこの文章も終わりです」という訳には、やはりいかないので、無理にでもしぼり出そうと思う。

「名は体を表す」というが、僕の場合は現在の蔵書にその性格があらわれている。今、原稿を書いている頭上には、なんと、ロフティングの「ドリトル先生全集」(恥かしながら小学校上級向の本だが)がならんでいる。そうかと思えば、横の本棚には曾野綾子の小説、ヘッセの短編集と、愛して止まぬ漫画のコミック本(なにをかいわんや)が同じ顔をしてならんでいる。さらに、足許にはフトンの形(ノ)にありとあらゆる分野の雑誌がちらかっている。これらが、僕の好奇心にあふれた(早い話が散漫な)性格を実に良く物語っている。この他にも友人から借りたり、図書室で借りた本もかなりあるが、SFあり論説あり旅行手引書ありで全くまとまりがない。

漫画や小説の類は結構気軽に読んだが、僕にとっては芥川もコミックも同じである。むしろ、芥川の辛ラツさよりも安っぽいコミックの方が救いに思えたことが多かった。学生はだいたいマンガが好きだと相場が決まっており、先生方は反対にあまり好まれない。しかし、コミックにしる小説にしるその内容についての価値は読者が決めるのが本当なのだ。安易に読めるものより、難解で時間をかけ読むものの方が価値があるとはいえない。読むきっかけというのは、僕にとっては大して意味のないことであるし、アレコレ考えて、汗水たらしながら読むのも性に合わない。もちろん、苦勞して活字を追うことの大切さも否定はしないが、骨を折ってつかんだ内容と同じ主張が安物の小説の中に実にスナナリと書かれてあったりもした。安易で結構ではないか。

某紳士服メーカーのCMにこんなものがあった。あ

ちこち空いている書架に、数人の男性が本をならべていく。そして、全部並べ終わって男たちが引きあげると、書架にならんだ本の背表紙の様子がセピア色で一人の女性の肖像を描いている……。僕の読書歴が、このCMのようなカッコいい体裁をしているわけではないが、このCMを思い出すにつけ考えるのだ。僕もやはり、他の連中と同じ「悩み多き青春」（いささか軽薄な言葉になり下がってしまっているが）を、無節操とも思える僕の読書歴にも、何かひとつの姿が浮かんできても不思議はない。何が見えるか、自分では説明し難いが、これはなにも僕個人に限ったわけではないだろう。

こうして思うと、やはり五年間に読んだ本は、いかに安易な読まれ方をしたにしても何らかの重みを持っている。散漫な自分ではあるが、この五年間ただ何もせず歩いて来たわけではない。同様に、読んだどんな本も、たとえ安物のマンガ本であったとしても、決して己れのコヤシにはならなかったはずはない。

僕らは若いのだ、好奇心や探求心がしぼんでしまわないうちに、早く、できるだけたくさん知った方がよいと思う。特定の作家や分野に固執することは無用だし、もっともっと読むことに対して貪欲であっていいのだ。考えることは後でいい。考えなくてはならないことは、おのずからやって来る。知ることが先決である。

「とにかく読め！」

これが後輩諸君への言葉である。

本 と 私

化学工学科卒業生 大林孝志

『山から流れ出る川の水はやがて海に入るがその間に岩があり、谷があり、また平野があって、ある時はせせらぎとなり、急流となって、そしてある時は大きく迂回して悠々と海に注ぐのだ。運河のように直線的だったら、何も美しいことはない。私達の人生もこれと同じだ。墓場に入るまでの何十年かをいかに変化多く、またいかに豊かにすすつか。それが問題だ。失恋、失敗、病気、そのように悲しい経験もすぎ去ってみればみんな人生を美しくする思い出の1つになるのだ。どうか挫けぬ勇気を持って生き抜いてください。』ということばは、武者小路実篤の本の一部です。それは、中学3年の入試勉強を始めたころ先生に「いくら入試勉強が忙しくても、1カ月に1冊ぐらゐの本を読む余

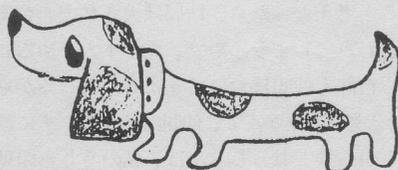
裕がなくてはいけないぞ。」と言われて、普通の時には、本などあまり読まない僕が、その時に読んだものです。

ちょうどその時期は、なんで入試勉強なんかやらないといけないのかなあと思っていたので、ものすごく感銘を受けました。そしてその時、今までぜんぜん本など読まなかったけど、高専に入ってからはもっと本を読もうと心に誓いました。

高専に入ってからはわりと読んだ方ですが、読んだ本といえば、夏休みの課題図書になるような文学小説ではなく、眉村卓や筒井康隆などのSF、松本清張やアガサ・クリスティーなどの推理小説や、源氏鶏太、五木寛之などの本でした。もうすこし文学小説なども読まないといけないとわかってはいたけれど、どうしても推理小説の方が読みやすいので、そっちの方を読んできました。しかし、活字に親しみが無い高専生にとっては、SFや推理小説でも本を読むことはいいことだと思います。

最後に、「読書志弥高」（書を読めば志いよいよ高し）これは中国の古人の言葉ですが、このことばをみんなに贈りたいと思います。

書物の中には、私たちを養い、はげまし、共に苦しみ、悩み助け合う友達がいっぱいいます。みんなは、読書を通して、自己を鍛え、高い志をもって立派な高専生になって下さい。



今年も百余名の卒業生が希望にもえて社会に巣立って行きました。この四編の短文は、先輩として、後輩の諸君に贈るメッセージです。

図書室の利用法、一冊の本との出会い、勉強法、レポートの対応法、思い出、と様々です。

在校生諸君もまた随時、読書感、提案、要望、疑問、何でも結構です。読みっぱなしから一歩を進めて発表する能力も併せて磨いて下さい。「図書館だより」に寄稿して腕だめしは如何でしょう。

あなたの青春を豊かにし、社会に出てお役に立つことでしょう。更に読書という習慣を「青春まっただなか」という今から身につけておく事は、問われている老年に至った時、ダイヤモンドの様な輝きを放ってあなたに報いる筈です。サー！すぐに図書室へ。

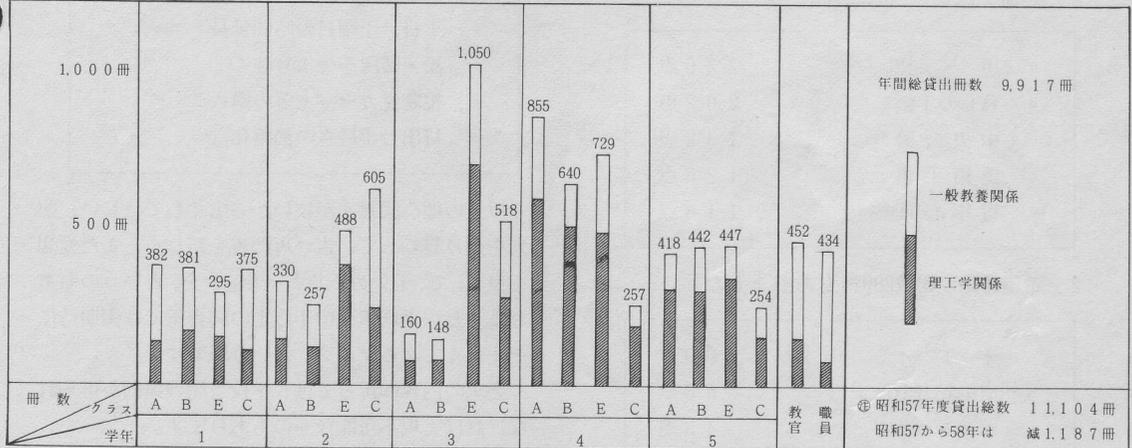
昭和58年度 図書館利用統計

毎日の統計をとり乍ら、もしや、というおそれが現実のものとなり、昭和58年度はツイに一万台を割りました。統計グラフによれば、昨57年度は唯一の2桁という名誉を荷った3Bが頑張って3桁台に乗せたのは救いです。でも入学以来、常にトップの3Eからは遠い数字です。3桁といっても様々で、吾クラスの数字と比べて、他を圧する意気ごみがほしい。参考までに、昭和55年以降の利用冊数を掲げますので、併せて努力目標にして下されば幸いです。

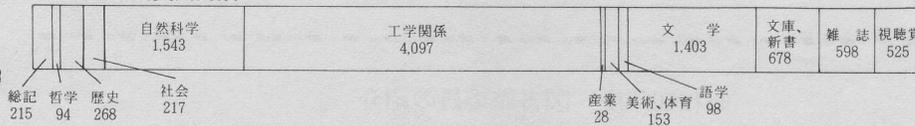
昭和55年 11,104冊 昭和56年 12,327冊 昭和57年 10,411冊 昭和58年 9,917冊

昭和58年度 図書館利用統計

1. クラス別年間貸出冊数



2. 分類別年間貸出冊数



3. 分類別蔵書冊数 (昭和59年3月末現在)

総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	語学	文学	文庫、新書
1,927	1,884	3,950	2,294	11,077	13,908		2,988	8,090	3,993

155

どうして本を読まなきゃイケナイ？ それはアナタがより人間らしく生きるための精神的（こころ）な支えとなるものだから。より人間的ッテ？ ソレコソ図書館に来てアナタが自分で探してごらん下さい。

小説の中にも「何故」という事を真剣に模索し、応えてくれる作品がある筈です。「ナーンダ、本も読まないんですか。本は読みなさいよ。読書しない人間が、戦争を起すんです。」（三浦綾子著「石ころのうた」から）

雑誌アンケートについて報告

昨年の暮から、今年初めにかけて図書室に配架してある雑誌についてアンケート調査を行いました。配布枚数907枚、回収総数682枚、ほぼ75パーセントに当たります。この種の回収率としては高い数字と思われる。次にその結果の一部を紹介いたします。

◇ アンケートの内容は、次の通りです。

1. 配架雑誌83種中、不要と思うもの
2. 新しく購入してほしい雑誌名
3. 今、読んでみたいと思う単行書名
4. 図書室に対する要望

3. 雑誌ではないので、ハブきますが、御要望にこたえて、出来るだけ図書室へ行ってみようという気を起させるように、参考にさせていただきます。

4. 附和雷同、と申せましょうか、特定のクラスに限って、似た様なフザケタ要望がありました。マジメなトップ5点は次の通りです。

1. 83種中、トップ5点

◦ 思想	230点
◦ 暮しの手帳	202点
◦ 中央公論	132点
◦ 美術手帳	126点
◦ 青年心理	118点

◦ コピーサービス
◦ 平日、土曜日の時間延長
◦ 冷・暖房を今より強く
◦ 視聴覚カセット等の購入
◦ 貸出し手続きの簡略化

2. 希望雑誌 総数289種もありました。

◦ オートバイ	69点
◦ Music Life	58点
◦ ベストバイク	43点
◦ モーターサイクリスト	38点
◦ フォーカス	37点

以上の他、図書室が狭いから広くしてほしい、配列を分かりやすくして、古い専門書を新しく、また愛読を良くして、若いガイドネーションを、というのもありました。平均年齢中年以上の図書室では御期待にそえなくてすみません、という所です。

要求の内容によっては、学校当局の援助が得られなければ実現不可能なものもあります。

以上の事は今後の図書室にとって有難い意見であり、参考となるものです。改善努力の目標にしたいと思っております。御協力、有難うございました。

昭和59年度 図書館委員の紹介

◦ 印…部会長

学科名	図書部会	視聴覚部会	研究紀要部会
一般教科	◦小谷、中和田	小谷、中和田	小谷、中和田
機械工学科	小島	小島	◦関口
電気 "	宮田	日高	宮田
化学 "	井口	◦河越	河越